

## 親しい相手との身体接触に関する日韓比較研究<sup>1), 2)</sup>

曹 美庚\*・釘原直樹\*\*

### A Comparative Study on Touching Behaviors with Close Persons between the Japanese and Koreans

Mikyung CHO\* and Naoki KUGIHARA\*\*

This study aims to examine the differences in touching behaviors between the Japanese and Koreans to draw the implications for cross-cultural communication. A survey questionnaire on body accessibility was administered to 202 Japanese and 212 Korean undergraduate students. Significant differences in terms of touching behavior and its developmental changes from childhood through adolescence were found between Japanese and Korean students; the former having been touched significantly less by a close person, such as father, mother, or same-sex friend. Koreans tend to actively use touching behaviors among close persons to express themselves, whereas Japanese seem to use alternative methods for the same purpose instead of overtly using touching behaviors. Based on the results of the developmental changes, these cultural differences could be attributed to the cultural norms, which are internalized in the process of one's growth. Adequate understanding of the characteristics of touching behaviors in different cultures is imperative for a successful cross-cultural communication.

**key words:** touching behavior, cultural differences, cross-cultural communication, intimacy, developmental changes

人が世の中と最初にコミュニケーションを行う方法は接触である。接触は直接的に自分の存在を相手に伝える原初的な伝達形態であると同時に、コミュニケーションのもっとも基本的で重要な方法といえる (e.g., Argyle, 1988; 大坊, 1998; Montagu, 1978)。身体接触には、肯定的なものと否定的なものがあり (Nelson-Jones, 1990 相川訳 1993)、肯定的な身体接触は対人関係において親密化を促進する上で大きな役割を果たす (川名, 2008; Feldman, Philippot & Custrini, 1991; Jourard, 1966)。本研究では、親密化を促進す

る肯定的な身体接触に注目し、接触行動における日韓間の違いを考察するとともに、発達の観点およびコミュニケーションの観点からその相違について検討を行う。

#### 文化と身体接触行動

文化と身体接触との関連については、高接触文化 (high-contact culture) と非接触文化 (noncontact culture) という観点から多くの研究が行われており、中東、南米、南欧は高接触文化として、北欧、北米、アジアは非接触文化として分類されている (e.g., DiBiase

<sup>1)</sup> 本研究は、平成 23–25 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究 C, 課題番号 23520727, 研究代表者: 曹 美庚) と平成 26–28 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究 C, 課題番号 26503016, 研究代表者: 曹 美庚) の助成を受けた。

<sup>2)</sup> 本研究の一部は、日本心理学会第 79 回大会 (2015) と日本社会心理学会第 56 回大会 (2015)、および異文化コミュニケーション学会第 30 回年次大会 (2015) で報告された。

\* 阪南大学

Faculty of International Communication, Hannan University, Amami Higashi, Matsubara, Osaka, 580–8502, Japan  
e-mail: cho@hannan-u.ac.jp

\*\* 大阪大学

Osaka University

& Gunnoe, 2004; Hall & Friedman, 1999; Mazur, 1977)。

Barnlund (1973) の日米比較や Hatta & Dimond (1984) の日英比較、呉・宇津木 (2008) の日中比較などから、同じ非接触文化に分類される英米中よりも日本は身体接触の度合いが低い文化であることが示された。身体接触は直接的で明確なメッセージを持つコミュニケーション・チャンネルである (仁平・残間・平田・Foster, 1998) が、日本では成長とともに身体接触が内面の気持ちを表現する方法として用いられなくなるといふ (Barnlund, 1973)。さらに、日本人は家族や親友といった親密な関係においてさえ身体接触をしない文化的特徴があるという指摘もある (川名, 2008)。一方、韓国では身体接触到寛容的な文化が存在し、女性同士が手をつないで歩いたり、男性もよく接触する傾向があるなど、身体接触は日常的に用いられる重要なコミュニケーション・チャンネルの一つとして積極的に活用され、かつ重要な役割を果たしているといわれる (曹, 2010; Cho & Kugihara, 2013; 林, 1984; 大崎, 2006)。

これらの先行研究を踏まえると、非接触文化として分類されるアジア文化の中でも、日本と韓国は身体接触行動に違いがあると推察される。その違いはコミュニケーション・チャンネルの利用様態の相違として捉えることができる。

### 発達の観点と身体接触行動

身体接触を発達の観点から検討した先行研究において、日本人の身体接触は成長とともに急激に減少していくという側面が示された。Barnlund (1973) は、日米ともに幼児期は親密性の高い身体接触があるものの、成人初期ごろから異なった方向に進み、アメリカでは継続して身体接触が保たれるが、日本では児童期以降は身体的親密さが急激に減少するという。Montagu (1978) も、日本の幼児はアメリカの幼児に比べはるかに親から多くの接触刺激を受けるが、成長とともに身体接触が激減すると指摘している。親との身体接触が成長とともに急減する日本人の特徴は、鈴木・春木 (1989) や、呉・宇津木 (2008) の日中比較、平田・仁平・残間・Foster (1998) の日ポリビア比較などにおいても確認されている。

一方、韓国人の身体接触を発達の観点から考察した先行研究は見受けられないが、韓国人大学生が身体接触到寛容的である (曹, 2010; 林, 1984; 大崎, 2006) ことから、成長に伴う身体接触度合いの減少

幅が日本人よりは小さいと判断されるため、発達の観点においても日韓の間には違いが推察される。

### 研究目的

異質性の高い文化間のコミュニケーションにおいては、相違が前提でコミュニケーションが行われるため、互いが寄り添う努力を惜しまないばかりでなく、コミュニケーション上の失敗が生じた場合にも軌道修正や学習が容易である。しかしながら、類似性の高い文化間のコミュニケーションにおいては、共感性が高いという良さもあるが、相違が十分想定されずコミュニケーションが図られ、意図せぬ誤解やコミュニケーション・トラブルを招くことがある。その場合、コミュニケーションに対する共感性や期待値が高いがゆえに、誤解はむしろ大きくなり、相違の受け入れにも時間がかかってしまう。そのため、同じ文化圏に属する類似文化間の異質性に注目し、その含意を明らかにすることは異文化コミュニケーションにおいて重要な意味を持つ。

本研究では、日本と韓国の大学生を対象に、身体各部位に対する接触頻度の調査と身体接触の発達の変化の調査を行い、同じ非接触文化圏に属する日本と韓国における身体接触行動の相違を明らかにする。その結果を踏まえ、類似性の高い文化 (日韓) 間の異質性 (身体接触行動の相違) への気づきを促し、親しみを表現し合う際の有効な異文化コミュニケーションのあり方を検討することを研究の目的とする。

## 方 法

### 調査協力者

日本と韓国において、2012年9月から12月にかけて質問紙調査を行った。日本では関西地方の2つの大学の学部生260名、韓国ではソウル市と大邱市の4つの大学の学部生278名を対象にした<sup>3)</sup>。未回収分や記入漏れのあるもの、父親、母親、あるいは異性親友がいないと回答したものなどを除外し、日本202名 (男子98名、女子104名、平均年齢=19.55歳、SD=1.17)、韓国212名 (男子96名、女子116名、平均年齢=21.18歳、SD=1.74) を分析対象とした。

### 調査内容

身体接触を「日常生活の中で行われる悪意をもた

<sup>3)</sup> 外国籍あるいは海外長期滞在の経験を有する学生本人や接触対象者は調査の対象外とした。

ない身体接触，すなわち，なでたり，さすったり，軽く触れたり，手を握ったり，腕や肩を組んだり，握手やハグをするなどの肯定的な接触」に限定したうえで調査を行った。否定的な接触あるいは偶発的な接触を含まない，親密表現としての身体接触のみを調査対象とした。

**調査1** 身体接触の対象者を，自分の父親，母親，同性親友，異性親友の4者に限定し，身体の各部位ごとに過去1年間どの程度の肯定的接触の授受を行ったかについて尋ねた。既存研究はおおむね接触の有無の調査にとどまっており，各部位に対する接触頻度の調査を試みた研究はほとんど見受けられない。本調査では，各対象者の身体部位ごとの接触の有無に加え，接触の頻度（少中多）をも測定し，接触無に0点，少に1点，中に2点，多に3点を与え，それを各部位ごとの接触頻度得点とした。調査に用いた身体図は，「自分から各対象者への接触」，「各対象者から自分への接触」の計8つのケースを別々のシートにし，順番をずらして提示することで，カウンターバランスがとれるよう配慮した。また，Jourard (1966) の分類のうち，目・鼻・口・耳を一つ（顔）にまとめ，首の前後，大腿部の前後，脚の前後をそれぞれ統合した18分割図を用いることで弁別力向上を図った。

**調査2** 自分の父親，母親，同性親友，異性親友といった相手から，幼児期から現在に至るまでの発達段階においてどの程度の接触を受けたか（接触経験）を自己評定してもらい，1（まったく触られなかった）から10（非常によく触られた）までの10段階で回答を求めた。成長段階の区分は，鈴木・春木 (1989) を参照し，幼稚園期，小学低学年（小1から小3），小学高学年（小4から小6），中学時代，高校時代，大学時代といった6つの時期に区分した。

なお，日本語版と韓国語版の質問紙については，第三者によるバックトランスレーションの手続きを経て等質性と整合性を確保した。調査結果の分析には，IBM SPSS Statistics ver.22.0を用いた。

## 結 果

### 「接触」と「被接触」間の相関関係

相手からよく接触される人は自分からも相手によく接触すると考えられるため，対象者ごとに，接触

頻度得点の合計点（18部位合計）と被接触頻度得点の合計点（18部位合計）間の相関を分析した。

日本人大学生の場合，対象者ごとの相関係数は，父親（男子  $r=.82$ ，女子  $r=.68$ ），母親（男子  $r=.56$ ，女子  $r=.79$ ），同性親友（男子  $r=.73$ ，女子  $r=.93$ ），異性親友（男子  $r=.96$ ，女子  $r=.96$ ）のいずれにおいても有意であった（すべて  $p<.001$ ）。同様に，韓国人大学生の場合も，父親（男子  $r=.48$ ，女子  $r=.50$ ），母親（男子  $r=.63$ ，女子  $r=.71$ ），同性親友（男子  $r=.76$ ，女子  $r=.88$ ），異性親友（男子  $r=.93$ ，女子  $r=.92$ ）のいずれにおいても有意であった（すべて  $p<.001$ ）。

対象者ごとに接触と被接触の間に高い正の相関があったので，本稿の分析においては，多くの既存研究と同様に被接触に焦点を合わせ，自分が相手から受ける接触（受動接触）のみを分析対象とした。

### 身体接触度の日韓比較

各対象者から受けた接触頻度得点の合計点（18部位合計）を身体接触度（総合指標）の尺度得点とした。身体接触度における日韓間の違いを明らかにすべく，身体接触度を従属変数とする，文化（日韓）×性×対象者（対応あり要因）の3要因分散分析を行った。

分散分析の結果，文化（日韓）×対象者の交互作用が有意であったので ( $F(3, 1230)=13.90, p<.001, \eta_p^2=.03$ )，下位検定として単純主効果の検定を行った。その結果，父親 ( $F(1, 410)=68.75, p<.001, \eta_p^2=.14$ ) と母親 ( $F(1, 410)=95.93, p<.001, \eta_p^2=.19$ ) において文化の単純主効果が有意であり，父親の場合，日本 ( $M=1.95, SD=4.03$ ) より韓国 ( $M=6.20, SD=6.06$ ) の方が，母親の場合も，日本 ( $M=4.21, SD=5.69$ ) より韓国 ( $M=10.71, SD=8.04$ ) の方が身体接触度が有意に高かった。同様に，同性親友における文化の単純主効果も有意であり ( $F(1, 410)=31.66, p<.001, \eta_p^2=.07$ )，日本 ( $M=5.50, SD=6.91$ ) よりも韓国 ( $M=9.44, SD=7.06$ ) において同性親友からの身体接触度が高いという結果が示された。異性親友における文化の単純主効果は認められなかった ( $F(1, 410)=.05, n.s.$ )。

また，日本における対象者の単純主効果も有意となっており ( $F(3, 408)=42.55, p<.001, \eta_p^2=.24$ )，ボンフェローニの方法による多重比較の結果から，父親 ( $M=1.95, SD=4.03$ ) < 母親 ( $M=4.21, SD=5.69$ ) < 同性親友 ( $M=5.50, SD=6.91$ ) < 異性親友 ( $M=11.48, SD=$

Table 1 身体部位別の接触率および接触頻度得点の日韓比較 (男子)

| 区分<br>部位 | 父親              |                    | 母親              |                       | 同性親友            |                     | 異性親友            |                   |
|----------|-----------------|--------------------|-----------------|-----------------------|-----------------|---------------------|-----------------|-------------------|
|          | 日               | 韓                  | 日               | 韓                     | 日               | 韓                   | 日               | 韓                 |
| 頭部       |                 |                    |                 |                       |                 |                     |                 |                   |
| 顔        | 4.08<br>(1.50)  | 18.75**<br>(1.33)  | 8.16<br>(1.00)  | 47.92***<br>(1.39)*** | 13.27<br>(1.46) | 15.63<br>(1.13)     | 49.23<br>(1.97) | 60.56<br>(1.74)   |
| 前頭       | 13.27<br>(1.31) | 30.21**<br>(1.41)  | 18.37<br>(1.00) | 47.92***<br>(1.48)*** | 28.57<br>(1.21) | 30.21<br>(1.24)     | 52.31<br>(1.71) | 56.34<br>(1.63)   |
| 後頭       | 5.10<br>(1.80)  | 29.17***<br>(1.50) | 11.22<br>(1.09) | 43.75***<br>(1.52)**  | 20.41<br>(1.15) | 33.33*<br>(1.38)    | 49.23<br>(1.66) | 56.34<br>(1.68)   |
| 胴体・上肢    |                 |                    |                 |                       |                 |                     |                 |                   |
| 前肩       | 8.16<br>(1.25)  | 27.08**<br>(1.50)  | 9.18<br>(1.11)  | 22.92**<br>(1.50)*    | 26.53<br>(1.39) | 37.50<br>(1.53)     | 40.00<br>(1.65) | 52.11<br>(1.49)   |
| 後肩       | 15.31<br>(1.47) | 51.04***<br>(1.43) | 24.49<br>(1.13) | 48.96***<br>(1.36)*   | 36.73<br>(1.22) | 61.46**<br>(1.59)** | 46.15<br>(1.57) | 63.38*<br>(1.71)  |
| 背中       | 8.16<br>(1.38)  | 36.46***<br>(1.29) | 12.24<br>(1.17) | 44.79***<br>(1.42)    | 20.41<br>(1.20) | 43.75***<br>(1.48)  | 40.00<br>(1.62) | 56.34<br>(1.78)   |
| 上腕       | 5.10<br>(1.40)  | 36.46***<br>(1.37) | 11.22<br>(1.36) | 50.00***<br>(1.38)    | 31.63<br>(1.39) | 57.29***<br>(1.46)  | 60.00<br>(1.80) | 70.42<br>(1.92)   |
| 前腕       | 6.12<br>(1.33)  | 29.17***<br>(1.39) | 10.20<br>(1.40) | 45.83***<br>(1.55)    | 23.47<br>(1.44) | 55.21***<br>(1.43)  | 55.38<br>(1.86) | 81.69**<br>(1.93) |
| 手        | 9.18<br>(1.44)  | 52.08***<br>(1.60) | 16.33<br>(1.31) | 72.92***<br>(1.71)*   | 34.69<br>(1.47) | 55.21**<br>(1.53)   | 64.62<br>(2.21) | 84.51**<br>(2.33) |
| 性的部位     |                 |                    |                 |                       |                 |                     |                 |                   |
| 首        | 4.08<br>(1.25)  | 10.42<br>(1.50)    | 4.08<br>(1.00)  | 11.46<br>(1.46)*      | 15.31<br>(1.33) | 19.79<br>(1.21)     | 33.85<br>(1.73) | 38.03<br>(1.63)   |
| 胸        | 2.04<br>(1.00)  | 9.38*<br>(1.00)    | 3.06<br>(1.00)  | 8.33<br>(1.13)        | 17.35<br>(1.29) | 15.63<br>(1.13)     | 38.46<br>(1.92) | 32.39<br>(1.74)   |
| 腹        | 3.06<br>(1.00)  | 10.42*<br>(1.10)   | 4.08<br>(1.75)  | 21.88***<br>(1.29)    | 14.29<br>(1.43) | 23.96<br>(1.22)     | 33.85<br>(1.82) | 40.85<br>(1.76)   |
| 股        | 1.02<br>(1.00)  | 0.00<br>(—)        | 1.02<br>(1.00)  | 1.04<br>(1.00)        | 8.16<br>(1.50)  | 7.29<br>(1.43)      | 33.85<br>(1.91) | 22.54<br>(1.81)   |
| 尻        | 3.06<br>(1.00)  | 8.33<br>(1.13)     | 5.10<br>(1.40)  | 27.08***<br>(1.35)    | 15.31<br>(1.33) | 17.71<br>(1.06)     | 30.77<br>(1.75) | 26.76<br>(1.68)   |
| 大腿       | 1.02<br>(1.00)  | 8.33*<br>(1.38)    | 5.10<br>(1.20)  | 8.33<br>(1.25)        | 9.18<br>(1.33)  | 9.38<br>(1.11)      | 27.69<br>(1.83) | 32.39<br>(1.57)   |
| 脚        |                 |                    |                 |                       |                 |                     |                 |                   |
| 下腿       | 3.06<br>(1.67)  | 8.33<br>(1.13)     | 4.08<br>(1.00)  | 9.38<br>(1.11)        | 7.14<br>(1.43)  | 4.17<br>(1.00)      | 23.08<br>(1.80) | 19.72<br>(1.50)   |
| 膝        | 2.04<br>(1.50)  | 10.42*<br>(1.50)   | 2.04<br>(1.00)  | 8.33*<br>(1.13)       | 7.14<br>(1.43)  | 6.25<br>(1.00)      | 23.08<br>(1.73) | 22.54<br>(1.50)   |
| 足        | 2.04<br>(1.00)  | 5.21<br>(1.00)     | 4.08<br>(1.25)  | 14.58*<br>(1.43)      | 6.12<br>(1.50)  | 2.08<br>(1.00)      | 21.54<br>(1.79) | 18.31<br>(1.46)   |

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ 

注) 各部位ごとに、上段の数値は各対象者からの接触率 (接触ありと回答した人の割合, %) を示し、下段の ( ) 内の数値は接触ありと回答した人の接触頻度得点 (少=1点, 中=2点, 多=3点) の平均値を示す。

14.88) の順に身体接触度が有意に高いことが示された。韓国における対象者の単純主効果も有意であったが ( $F(3, 408) = 38.27, p < .001, \eta_p^2 = .22$ )、ボンフェローニの方法による多重比較の結果、父親 ( $M = 6.20, SD = 6.06$ ) < 同性親友 ( $M = 9.44, SD = 7.06$ ) < 母親 ( $M = 10.71, SD = 8.04$ ) の順に身体接触度が有意に高く、母親と

異性親友 ( $M = 11.10, SD = 11.91$ ) の間、および同性親友と異性親友の間に有意差は見られなかった。

一方、文化 (日韓) × 性の交互作用は有意ではなかったが ( $F(1, 410) = .02, n.s.$ )、文化の主効果 ( $F(1, 410) = 39.61, p < .001, \eta_p^2 = .09$ ) と性の主効果 ( $F(1, 410) = 19.48, p < .001, \eta_p^2 = .05$ ) はいずれも有意であり、日本 ( $M =$

Table 2 身体部位別の接触率および接触頻度得点の日韓比較（女子）

| 区分<br>部位 | 父親              |                      | 母親              |                       | 同性親友            |                       | 異性親友            |                       |
|----------|-----------------|----------------------|-----------------|-----------------------|-----------------|-----------------------|-----------------|-----------------------|
|          | 日               | 韓                    | 日               | 韓                     | 日               | 韓                     | 日               | 韓                     |
| 頭部       |                 |                      |                 |                       |                 |                       |                 |                       |
| 顔        | 6.73<br>(2.00)  | 27.59***<br>(1.44)   | 26.92<br>(1.21) | 58.62***<br>(1.68)*** | 25.00<br>(1.39) | 47.41**<br>(1.36)     | 57.14<br>(2.00) | 61.64<br>(1.96)       |
| 前頭       | 25.96<br>(1.56) | 47.41**<br>(1.44)    | 54.81<br>(1.26) | 63.79<br>(1.60)**     | 44.23<br>(1.44) | 56.90<br>(1.50)       | 64.29<br>(2.13) | 71.23<br>(1.81)*      |
| 後頭       | 21.15<br>(1.59) | 54.31***<br>(1.44)   | 43.27<br>(1.29) | 56.90*<br>(1.70)**    | 41.35<br>(1.47) | 51.72<br>(1.58)       | 65.71<br>(2.26) | 68.49<br>(1.82)**     |
| 胴体・上肢    |                 |                      |                 |                       |                 |                       |                 |                       |
| 前肩       | 10.58<br>(1.36) | 15.52<br>(1.56)      | 26.92<br>(1.54) | 31.03<br>(1.47)       | 28.85<br>(1.57) | 31.03<br>(1.64)       | 51.43<br>(1.69) | 45.21<br>(1.70)       |
| 後肩       | 23.08<br>(1.46) | 50.00***<br>(1.35)   | 43.27<br>(1.44) | 59.48*<br>(1.65)      | 37.50<br>(1.49) | 62.93***<br>(1.69)    | 54.29<br>(1.79) | 65.75<br>(1.94)       |
| 背中       | 10.58<br>(1.27) | 42.24***<br>(1.43)   | 31.73<br>(1.39) | 67.24***<br>(1.65)*   | 32.69<br>(1.38) | 56.90***<br>(1.65)    | 52.86<br>(1.84) | 54.79<br>(1.83)       |
| 上腕       | 20.19<br>(1.33) | 32.76*<br>(1.50)     | 48.08<br>(1.44) | 62.07*<br>(1.78)*     | 58.65<br>(1.57) | 76.72**<br>(1.75)     | 64.29<br>(1.73) | 60.27<br>(1.91)       |
| 前腕       | 18.27<br>(1.26) | 47.41***<br>(1.56)   | 50.00<br>(1.56) | 81.90***<br>(1.93)**  | 65.38<br>(1.54) | 87.07***<br>(1.94)*** | 64.29<br>(1.89) | 76.71<br>(1.98)       |
| 手        | 16.35<br>(1.47) | 63.79***<br>(1.72)   | 50.96<br>(1.60) | 84.48***<br>(2.10)*** | 55.77<br>(1.53) | 87.93***<br>(1.96)**  | 72.86<br>(2.28) | 73.97<br>(2.44)       |
| 性的部位     |                 |                      |                 |                       |                 |                       |                 |                       |
| 首        | 4.81<br>(1.60)  | 11.21<br>(1.31)      | 10.58<br>(1.46) | 23.28*<br>(1.33)      | 4.81<br>(1.40)  | 19.83**<br>(1.26)     | 41.43<br>(1.66) | 39.73<br>(1.55)       |
| 胸        | 0.00<br>(—)     | 0.86<br>(1.00)       | 3.85<br>(1.00)  | 8.62<br>(1.50)        | 10.58<br>(1.27) | 11.21<br>(1.46)       | 45.71<br>(2.25) | 19.18**<br>(1.71)*    |
| 腹        | 0.96<br>(1.00)  | 6.90*<br>(1.38)      | 12.50<br>(1.39) | 36.21***<br>(1.48)    | 16.35<br>(1.29) | 32.76**<br>(1.40)     | 48.57<br>(1.88) | 30.14*<br>(1.73)      |
| 股        | 0.00<br>(—)     | 1.72<br>(1.50)       | 1.92<br>(2.50)  | 6.03<br>(1.29)        | 0.00<br>(—)     | 1.72<br>(2.50)        | 40.00<br>(2.14) | 13.70***<br>(1.20)*** |
| 尻        | 4.81<br>(1.20)  | 10.34<br>(1.33)      | 9.62<br>(1.10)  | 41.38***<br>(1.67)**  | 6.73<br>(1.29)  | 27.59***<br>(1.56)    | 34.29<br>(2.13) | 21.92<br>(1.50)**     |
| 大腿       | 2.88<br>(1.67)  | 6.90<br>(1.63)       | 11.54<br>(1.42) | 28.45**<br>(1.30)     | 4.81<br>(1.20)  | 15.52*<br>(1.33)      | 44.29<br>(1.87) | 23.29**<br>(1.65)     |
| 脚        |                 |                      |                 |                       |                 |                       |                 |                       |
| 下腿       | 4.81<br>(1.20)  | 15.52*<br>(1.50)     | 14.42<br>(1.27) | 31.90**<br>(1.41)     | 0.96<br>(1.00)  | 12.07**<br>(1.36)     | 27.14<br>(1.53) | 23.29<br>(1.82)       |
| 膝        | 2.88<br>(1.33)  | 11.21*<br>(1.46)     | 7.69<br>(1.38)  | 20.69**<br>(1.33)     | 2.88<br>(1.00)  | 11.21*<br>(1.15)      | 28.57<br>(1.65) | 21.92<br>(1.69)       |
| 足        | 3.85<br>(1.00)  | 19.83***<br>(1.48)** | 10.58<br>(1.36) | 25.86**<br>(1.30)     | 0.96<br>(1.00)  | 9.48**<br>(1.18)      | 21.43<br>(1.67) | 19.18<br>(1.64)       |

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

注) 各部位ごとに、上段の数値は各対象者からの接触率（接触ありと回答した人の割合、%）を示し、下段の（ ）内の数値は接触ありと回答した人の接触頻度得点（少=1点、中=2点、多=3点）の平均値を示す。

5.79,  $SD=9.57$ )より韓国 ( $M=9.36, SD=8.76$ )の方が、男子 ( $M=6.25, SD=9.14$ )より女子 ( $M=8.82, SD=9.34$ )の方がそれぞれ身体接触度が有意に高い結果となった。

部位別の接触率および接触頻度得点の日韓比較

身体部位ごとに、日本人大学生の接触率（接触あ

りと回答した人の割合、%）と韓国人大学生の接触率を求め、2つの母比率の差の検定を行った（Table 1およびTable 2の上段の数値）。男女いづれにおいても、父親と母親からの接触については、頭部と胴体・上肢を中心とした多くの部位において、韓国の接触率が日本の接触率より有意に高かった。同性親

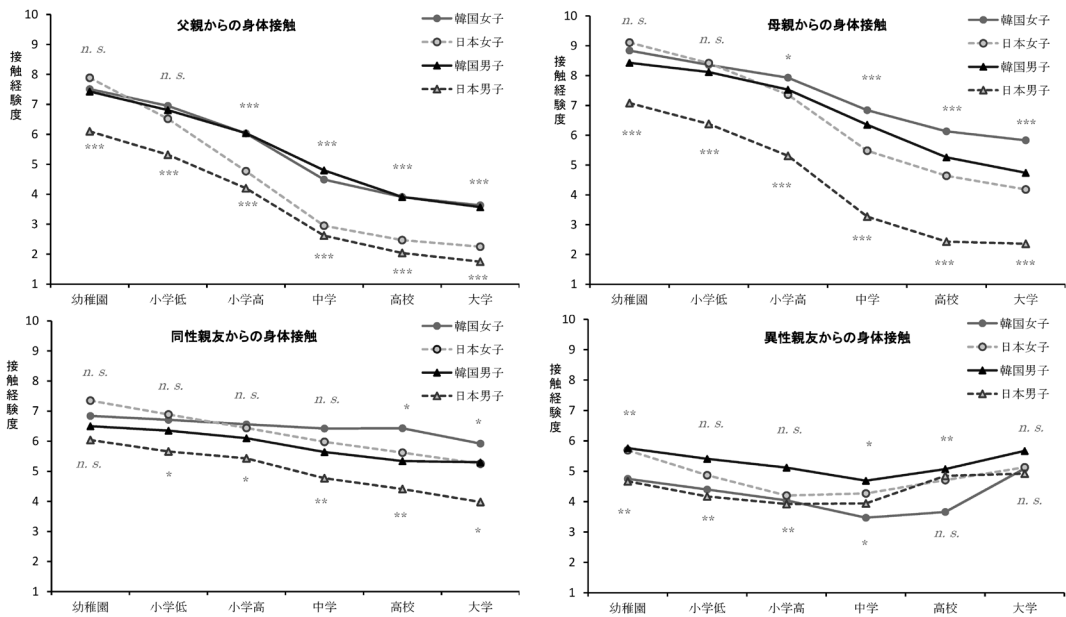


Figure 1 身体接触経験度の発達の变化

注) 各発達段階別に、グラフ上部のアスタリスク (\*) と n.s. は女子の日韓差の有無を示し、グラフ下部のアスタリスク (\*) と n.s. は男子の日韓差の有無を示す。\**p*<.05, \*\**p*<.01, \*\*\**p*<.001

友についても、男子は胴体・上肢を中心に6部位、女子は胴体・上肢を含む13部位において韓国の接触率が日本のそれを上回っている。有意差のあった接触率のうち、日本の接触率が韓国のそれを上回ったのは、女子における異性親友からの性的部位への接触率のみであった。

次に、日韓における接触頻度の差を分析すべく、各部位ごとに、接触ありと回答した人のみを対象に接触頻度得点(接触頻度少=1点; 中=2点; 多=3点)の平均値を求め、2つの母平均の差の検定を行った(Table 1 および Table 2 の下段の括弧内数値)。母親からの接触頻度得点において、頭部と胴体・上肢を中心に、男子は7部位、女子は8部位に有意な日韓差が出ており、接触頻度得点の平均値はいずれも韓国の方が日本より高かった。父親と同性親友についても、男子における同性親友からの接触頻度得点において1部位(肩の後部)、女子における父親からの接触頻度得点と同性親友からの接触頻度得点において3部位(足、手、前腕)に有意差が示され、いずれも韓国の方が日本を上回っている。反面、異性親友からの接触頻度得点においては、女子の場合、性的部位を含む5部位に有意差が見られ、日本の接触頻度得点が韓国の接触頻度得点より高かった。

発達段階別の接触経験度の日韓比較

発達段階別に各対象者から受けた接触の自己評定値(以下、接触経験度)を Figure 1 にまとめた。

父親からの接触経験度においては、男子の場合、幼稚園期から日韓間で有意差(*t*(192)=3.82, *p*<.001)が出ており、韓国男子(*M*=7.43, *SD*=2.14)の方が日本男子(*M*=6.10, *SD*=2.66)より父親からの接触を多く経験していることがわかる。以降、大学までその有意差は保たれている。女子の場合は、小学低学年(小1から小3)までは父親からの接触が両国ともに高い水準であるが、小学高学年(小4から小6)になると日韓間で有意差(*t*(218)=4.02, *p*<.001)が表れ始め、韓国女子(*M*=6.03, *SD*=1.98)の方が日本女子(*M*=4.77, *SD*=2.67)より父親からの接触を多く経験していることがわかる。以降、大学までその有意差は保たれている。このような傾向は母親の場合にもほぼ同様であり、男子は幼稚園期から(*t*(192)=4.15, *p*<.001)、女子は小学高学年(小4から小6)から日韓間で有意差が表れ始め(*t*(218)=2.06, *p*<.05)、大学までその有意差は持続している。

同性親友からの接触経験度においては、男子は小学低学年(小1から小3)から有意差が出ていた(*t*(192)=2.06, *p*<.05)、女子は高校の頃から有意差が表れた(*t*(218)=

2.51,  $p < .05$ )。異性親友からの接触については、男子の場合、中学までは有意差があるが高校からは有意差がなくなる反面、女子の場合は、小学校と大学時代には有意差が表れなかった。

## 考 察

### 結果の解釈

本研究では、日本と韓国の大学生を対象に、親しい相手との身体接触について調査し、総合指標としての身体接触度（接触頻度得点の合計点）、部位別接触率、部位別接触頻度得点、発達段階別接触経験度といった4つの指標を分析した。分析結果によれば、父親、母親、同性親友からの身体接触では、韓国の身体接触度が日本のそれを有意に上回っており、部位別接触率についても、両親からは頭部と胴体・上肢を中心とした多くの部位において、同性親友からは男子は胴体・上肢と後頭部において、女子は胴体・上肢と脚を中心とした多くの部位において、韓国の接触率が有意に高かった (Tables 1, 2)。異性親友からの身体接触については、女子の場合、性的部位を中心に日本の接触率が有意に高いなど、他の対象者からの身体接触とは異なる様相を呈しており、身体接触の意味合いが他と異なっている。

また、接触ありと回答した人のみを対象とした部位別接触頻度得点の比較では、とりわけ母親からの接触頻度得点において頭部と胴体・上肢を中心に有意差が見られ、部位別接触率と併せて考慮すると、韓国の大学生は自分の母親からより多くの身体部位に、しかもより頻繁に接触を受けていることがわかる。また、韓国男子は同性親友の肩により頻繁に接触し (Table 1)、韓国女子は同性親友とより頻繁に手をつないだり、腕を組む様子も示された (Table 2)。逆に、日本女子は、異性親友から頭部と性的部位を中心に頻繁に接触を受けている様子がうかがえる。一方、身体接触度において、日本は、父親<母親<同性親友<異性親友の順となり、友人に重きが置かれているのに対し、韓国は、父親<同性親友<母親の順となっており、青年期においても同性親友より母親からの身体接触度が高いことがわかる。このような結果は、母親との身体接触においては韓国の方が日本を圧倒していると指摘した林 (1984) の調査結果を支持するもので、韓国における母親との絆の強さの表れといえる。

次に、発達段階別の接触経験度においては、男女間で異なる様相を呈し、女子の場合、小学低学年期までは両親や同性親友からの接触に日韓差は見受けられず、両国ともに高い身体接触が行われている。しかし、小学高学年期を境に、両親からの接触には日韓間で有意差が出始め、高校時代からは同性親友からの接触にも有意差が見られる。反面、男子の場合は、両親からの接触には幼稚園期から日韓差が表れ、同性親友からの接触についても小学低学年期から日韓差が見受けられる。しかも、異性親友を除いた父親、母親、同性親友からの接触においては、男女ともに発達段階のある時点で一度有意差が出ると、その差がその後も持続するという特徴を示した。

以上の結果から、異性親友を除けば、おおむね韓国の方が日本より身体接触の度合いが高く、母親からの接触においてはとりわけその程度が顕著であることがわかる。また、特に女子において、小学低学年期までは両親や同性親友からの接触経験度に日韓差は認められないが、その後の発達段階において有意差が表れ始めるという分析結果から、日韓で身体接触の位置づけや意味合いが異なり、その違いを個人が成長とともに文化規範として内在化した結果、日韓間で有意差が表れたものと推察される。なお、接触経験度の発達の变化に関する本研究の結果は、日本人は成長とともに両親との身体接触が急減する傾向があることを指摘した既存研究 (Barnlund, 1973; 鈴木・春木, 1989; 呉・宇津木, 2008; 平田他, 1998) の結果を支持するものである。

### 日韓の異文化コミュニケーション

石井・クロフ (1993) は、コミュニケーション・スタイルそのものが文化的特徴を反映しているとしながら、関係性を重視した日本的コミュニケーション観をもとに「遠慮察しコミュニケーション・モデル」を提示した。このモデルでは、「メッセージの送り手はその準備段階で、相手の心証を悪くしたり、プライドを傷つけたりしないように、慎重に記号化作業を行った結果、表現されたメッセージは意図が薄められたり、曖昧化したものになる一方、メッセージの受信側では、察し能力を発揮して、薄まったメッセージの補充および拡大を行い、発展的に解釈する」としている。石井・クロフ (1993) の主張する「遠慮察しコミュニケーション・モデル」が日本的コミュニケーション観を適切に捉えているとすれば、非言

語コミュニケーション・チャネルの中でも相対的に内的意図を強く含み、明確なメッセージを持ちやすい身体接触は、日本的コミュニケーション観には馴染み難いといえる。今回の日本の調査結果から、発達段階が進むにつれて両親からの身体接触は急減し、同性親友からの身体接触は緩やかに減少して行く様子が示されたが、これは、意図が薄められたり、曖昧化したものになったメッセージを送受信し合うという日本的な文化規範の内化を示すものと推察される。その結果、日本では、両親や同性親友との間で互いの内面を伝え合う際に、身体接触による表現を控え、遠慮察し能力を用いた代替的な方法によってそれを表現している可能性が高い。非接触文化では、視覚情報に基づいて世界を理解する傾向がある (Hall, 1966) と言われており、お辞儀を繰り返すしぐさや絵文字などは視覚情報によるコミュニケーション例の一部であるといえる。このような視覚情報が日本において身体接触の代替手段の一つとして用いられている可能性は十分考えられる。

一方、Barnlund (1973) が米国の特徴として述べている部分がおおむね韓国にはそのまま当てはまる。すなわち、幼児期の高い身体接触が成人になるまで対人関係維持のための自己表出の重要な方法として続くのである。中川 (2011) が「韓国人は情熱的で、ウリという濃密な人間関係を好む」と述べているとおり、韓国では、身体接触を促す風土はあってもそれを抑制するような風土は見当たらず、結果的に身体接触行動に寛容な文化が保たれている。

対人距離が近いほど親密さが伝わる (和田, 1996)、あるいは対人距離がゼロになるものが接触である (大坊, 1990) といった考え方を発展させ、曹 (2001, 2010) はゼロディスタンス (zero distance) ・モデルを提示した。このモデルでは、親密感と対人距離との関係性から身体接触の現象を説明している。すなわち、親しみが高まるほど対人距離が縮むことになり、親しみが最大化したときには対人距離が限りなくゼロに近づくというわけである。対人距離がゼロということは、親しみを感ずる相手に触れている状態を指すので、もしも接触に対する外的な制御がなく自由に自分の気持ちを表現できる環境が整っていれば、親しみの表れとして人はその相手に接触したり、あるいは接触されることによって自分も相手から親しみを持たれていることを確認することにな

る。今回の調査から、親密感の表現としての身体接触が日本より韓国において有意に多く用いられているという結果が示された。このような結果は、韓国のコミュニケーション文化がゼロディスタンス・モデルにより近いものであることを示唆している。

既述のように、同じ文化圏に属する類似文化 (日韓) 間の異質性に注目し、その含意を明らかにすることは異文化コミュニケーションにおいて大変重要である。本研究では、親密な関係にある相手との間で、非言語コミュニケーション・チャネルとしての身体接触に日韓の間で有意差があることを実証データによって示した。一般に、非接触文化の人と高接触文化の人が相互にコミュニケーションをとる場合、高接触文化の人は非接触文化の人から冷たさや距離感を感じることがあるという (Hall, 1966)。同じ非接触文化内であっても、身体接触度合いが有意に異なる文化間であれば同様のことが言えそうである。そのため、対人関係において親しみを表現し合う際に、韓国人は日本人からの少ない身体接触に対して距離感や冷たさを感じるのではなく、察し能力を発揮した理解を示すことが求められる。一方、日本人は韓国人からの積極的な接触行動に対して当惑や不快感を感じるのではなく、それを親密感の表現、あるいは肯定的なメッセージとして受け止める努力が必要といえる。もっとも、日本人女子大学生は、恋人以外からの身体接触に対しては不快感を抱くという報告 (川名, 2008) もあり、有効な異文化コミュニケーションを図るには、相手の接触文化への十分な理解が求められる。

#### 本研究の限界と課題

本研究の限界として、身体接触の度合いの測定を質問紙調査によって行っていること、過去の振り返りにより接触経験度を調査していること、サンプルが大学生に限定されていることなどが挙げられる。身体接触を含む非言語行動は無意識的に行われることが多いため、質問紙調査の手法では、実際の接触量ではなく接触量の自己認知を測定している可能性があることや、接触量の自己認知に文化が影響している可能性を排除できないといった限界がある。例えば、接触が頻繁に行われる韓国では、期待より少ない接触は接触少と判断され、接触の少ない日本では、期待より多くの接触を受けると接触多と判断されることも考えられる。発達的な変化に対する判断



も現在を基準とした想起が評定に影響している可能性がある。これらの点を考慮すると、実際の日韓差は本研究結果に表れた差よりもさらに大きい可能性があると見える。こうした限界を踏まえ、今後は、観察方法や長期的かつ縦断的な調査方法を用いるなどして、身体接触行動の文化差をより明確にしていく必要がある。

一方、身体接触に関するアジア文化圏内の比較研究が少ない中で、日韓比較の観点から実証研究を行った点、身体接触において日本と韓国の間ほどの程度の有意差があるかを明示した点、発達の観点から日韓差の説明を試みた点などは本研究の意義といえよう。今後、身体接触による自己表出や対人関係の構造を巡る議論をさらに深めていくには、アジア文化圏内の異質性に着目した文化比較研究の更なる蓄積が望まれる。

#### 引用文献

- Argyle, M. 1988 *Bodily Communication*. 2nd ed. Madison: International Universities Press.
- Barnlund, D. C. 1973 *Public and Private Self in Japan and United States*. Simul Press. (西山 千 (訳) 1973 日本人の表現構造 サイマル出版.)
- 曹 美庚 2001 日本人と韓国人の異文化コミュニケーション 人間環境学入門 中央経済社 pp.100-109.
- 曹 美庚 2010 対人関係における親密さとスキンシップ許容度：韓国人大学生の分析結果を中心に 九州大学大学院比較社会文化学府紀要, 16, 1-14.
- Cho, M., & Kugihara, N. 2013 The impact of the Big Five personality traits on the propensity to touch: Based on a survey of university students in Korea. *Korean Psychological Association Conference Book*, 5.
- 大坊郁夫 1990 対人関係における親密さの表現：コミュニケーションにみる発展と崩壊 心理学評論, 33, 322-352.
- 大坊郁夫 1998 しぐさのコミュニケーション：人は親しみをどう伝えあうか サイエンス社.
- DiBiase, R., & Gunnoe, J. 2004 Gender and culture differences in touching behavior. *Journal of Social Psychology*, 144, 49-62.
- Feldman, R. S., Philippot, P., & Custrini, R. J. 1991 Social competence and nonverbal behavior. In R. S. Feldman & Rime, B. (Eds.), *Fundamentals of Nonverbal Behavior*. Cambridge University Press. pp. 329-350.
- 呉 英妍・宇津木成介 2008 中国と日本の大学生における接触行動の発達の变化：主観的評定値に基づく比較 神戸大学国際文化紀要, 19, 17-28.
- Hall, E. T. 1966 *The Hidden Dimension*. 2nd ed. Gardner City, NY: Anchor Books.
- Hall, J. A., & Friedman, G. B. 1999 Status, gender and nonverbal behavior: A study of structured interactions between employees of a company. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 1082-1091.
- Hatta, T., & Dimond, S. J. 1984 Differences in face touching by Japanese and British people. *Neuropsychologia*, 22, 531-534.
- 林 建彦 1984 日本人と韓国人との表現構造比較研究：D.C. バーンランドの日・米比較を基礎として 東海大学文学部紀要, 41, 113-136.
- 平田 忠・仁平義明・残間理恵・Foster, M. 1998 身体接触に反映された親子関係の文化的差異 (3)：日本とボリビアの親子間の身体接触頻度の発達の变化 東北心理学研究, 48, 48.
- 石井 敏・クロフ, D. 1993 日米のコミュニケーション習慣の比較文化的研究 研究助成報告論文集 (上廣倫理財団), 4, 1-13.
- Jourard, S. M. 1966 An exploratory study of body-accessibility. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 5, 221-231.
- 川名好裕 2008 対人関係における身体接触の位置づけ 明治大学心理社会学研究, 3, 59-66.
- Mazur, A. 1977 Interpersonal spacing on public benches in contact vs. noncontact cultures. *Journal of Social Psychology*, 101, 53-58.
- Montagu, A. 1978 *Touching: The Human Significance of the Skin*. 2nd ed. New York: Harper & Row, Publishers.
- 中川典子 2011 日本人と韓国人ビジネスパーソンของตัวเอง開示に関する異文化比較調査：面接調査法による質的調査の結果から 流通科学大学論集, 23, 25-44.
- Nelson-Jones, R. 1990 *Human Relationship Skills: Training and Self-help*. 2nd. (相川 充 (訳) 1993 思いやりの人間関係スキル 誠信書房.)
- 仁平義明・残間理恵・平田 忠・Foster, M. 1998 身体接触に反映された親子関係の文化的差異 (1)：日本とボリビアの親子間の身体接触に対する反応の因子構造 東北心理学研究, 48, 46.
- 大崎正瑠 2006 日韓異文化コミュニケーションの一研究：在韓国日系企業のアンケート調査より コミュニケーション科学 (東京経済大学), 24, 215-228.
- 鈴木晶夫・春木 豊 1989 対人関係に関する試験的研究 早稲田心理学年報, 21, 93-98.
- 和田 実 1996 親密さのコミュニケーション 親密な対人関係の科学, 誠信書房 pp. 183-203.

(受稿：2016.9.7; 受理：2017.4.17)